日本産業衛生学会九州地方会ニュース

産衛九州

発行所　日本産業衛生学会九州地方会
〒890-8580
鹿児島県鹿児島市桜ヶ丘８丁目35-1
鹿児島大学医学部衛生学講座
TEL(099)275－5291
FAX(099)265－8434
発行責任者：地方会長　松下敏夫

（題字　倉恒匡徳筆）

特別寄稿

忘れ得ぬ先人たちの業績

熊本大学名誉教授　野　村　　茂

明治33年(1900)、農商務省に後藤新平（前内務省衛生局長）を主査とする職業性衛生調査会が設けられ、当時、内務省技師であった宮入慶之助も委員の１人だった。宮入は明治37年に福岡医科大学教授（衛生学）となったが、その指導をうけた産業衛生領域の先駆者たちに、大平得三助教授（後に第２代教授）のほか、石原修、南俊治、田代伊与治、眞島隆輔らがいる。横手社会衛生叢書には、石原修「労働衛生」（大15）、南俊治「鉱山衛生」（大15）があり、また、田代伊与治（三井三池）の「工業病論」（大3）は、当時の工場監督官、鉱務監督官の講習の参考書として配布使用された。眞島隆輔（三井田川）は大著「西洋医学史」（昭３）の著者として知られているが、田代、眞島の両著書に序文を書いた宮入の文章に、この両医師それぞれの炭鉱医としての産業医活動が窺える。

昭和4年(1929)、日本産業衛生協議会の創立にあたって、九州からは、河村一郎（三井三池炭鉱病院長）、黒田静（八幡製鉄病院副院長）、松下正信（福岡鉱務監督官）が理事に選任されているが、昭和10年(1935)の第８回総会会長の植村卯三郎（八幡製鉄病院長）が、本総会で設立が決定された地方会の、九州地方会代表となった。植村卯三郎には、著書、産業医学叢書第５冊「工業外科」（昭15）があり、丸岡紀元（八幡製鉄病院）には、日本皮膚科全書第13巻に、樋口謙太郎（九大教授）と共著の「職業性皮膚病」（昭31）があり、ともに、専門領域で評価されている。

その他、九州の産業衛生領域では、囚人炭鉱労働とその健康について意見書（昭33）を提出した菊池常喜（三池集治監医員）をはじめとして、大正、昭和に、宮下耕圃（明治鉱業）、時国武二郎（貝島）、谷徳次郎（二瀬）ら、そして、戦前から石西進（三井産研）、黒田嘉一郎（三井産研）、吉永萌（八幡病院）、喜瀬義章（八幡製鉄）らの活躍があった。戦後は、私個人として、江上信之（三井三池）、畑昇（八幡衛生課長）、細川一（日窒）、坂梨秀文（興人）、目野稔（東圧）等の諸氏は忘れ得ない。また、鉄鋼６社安全会議の推進者、氏岡正行（八幡製鉄安全課長）の名も逸することはできないだろう。（敬称略）

産業保健推進センター御紹介

鹿児島産業保健推進センターの活動状況について

労働福祉事業団
鹿児島産業保健推進センター
所長　鮫　島　耕一郎（鹿児島県医師会長）

当センターは、平成８年７月開設以来、施設の整備・充実を図り、鹿児島県の産業保健活動の拠点として、産業医、事業主、保健婦等の産業保健関係者への種々のサービスを、13名の各分野の専門スタッフ（相談員）を委嘱して、無料で提供し、その活動の支援を行っています。

さて、センター事業の一部を紹介しますと、新規のサテライト協力モデル事業の組織化があります。センターの活動を拡大・発展させ、産業保健水準を向上させる地域の牽引車としての中核的な役割を果たす事業場を、サテライトとして育成・組織化し、相互の協力関係を確立しようとして試行的に展開しているもので、これを基盤とした積極的な推進を図っていくこととしております。

また、産業保健に関する図書・ビデオ・作業環境測定機器等の教材を整備し、貸し出し等を行っていますが、産業保健関係者の積極的な利用促進の必要性を痛感いたしております。

なお、産業医・保健婦等に対する専門的、実践的な研修等をセンター専門スタッフが定期的に開催して効果を挙げておりますが、同時に、事業者を対象とした「事業主セミナー」の開催・キャンペーン活動及びホームページによる広報・啓発等も強力に推進してきました。

当センターとしては、今後、より実効ある産業保健活動の活性化の実現を図るため、出来る限りの支援に努めることとしております。

これからの諸行事予定

平成１０年度地方会総会のご案内（第２報）

学会長：大久保利晃（産業医科大学教授、産業医実務研修センター所長）

場所：産業医科大学ラマッツィーニ小ホール（北九州市）

日時：平成１０年６月１２日（金）午後２時から
１３日（土）夕方まで

１２日午後２時から５時まで一般演題

１３日午前　特別講演またはシンポジウム、一般演題

１３日午後　評議員会、総会、一般演題

懇親会は１２日午後５時３０分から午後７時

懇親会終了後、自由集会を２時間程度開催できるよう会場のお世話を致します。

ご希望の方は、世話人名、会合名、予定人数を４月末日までにお知らせください。

本部理事会及び九州地方会総会関連事項

日本産業衛生学会本部理事会報告

産業医科大学
大久保　利　晃

１．学会総会、全国協議会の開催予定について。

第７２回日本産業衛生学会（平成１１年）は、東京で日本医学会総会の開催される年に当たるので、いつものように同じ東京で開催されます。企画運営委員長は櫻井治彦産医研所長で、期日は５月６日（木）から８日（土）まで、特別研修会は９日（日）の予定です。翌年の第７３回は、九州地方会が当番で、北九州市で開催されることが地方会理事会、本部理事会で決まりました。

今年度の第８回産業医・産業看護全国協議会は、「環境と健康ー新しい世紀をみすえてー」をメインテーマに平成１０年１０月６日（火）に大阪国際交流センターにて、坂上皖庸（松下健康管理センター所長）企画運営委員長のもとで開催されます。第９回産業医・産業看護全国協議会（平成11年）は、東北地方会のお世話で仙台市開催が予定されています。

２．学会財政の見通しについて

財務担当理事から今後数年の中期財政見通しが報告されました。その結果、現状のままでは平成１１年度には赤字が避けられないことがわかりました。そこで先ず支出抑制策として、予算規模が最も大きい雑誌の発行経費を見直すため、６社から同一仕様書に基づき見積書を取り直すなどの検討がなされました。また、雑誌の発行経費上昇は、ページ数増加と、郵送料の上昇が主因ですが、最近投稿数が増え、掲載まで１年分の待ち時間が生じているなどの現状を考えると、総支出削減にも限界があると言うことになり、平成１１年から会費値上げもやむを得なしと言うことになりました。値上げ額は2,000円（8,000円→10,000円）ですが、地方会助成率は据え置く予定なので、助成額は１人あたり現状の1,200円から自動的に1,500円になりますので、地方会財政にとっては朗報（？）かもしれません。

３．役員選挙制度の検討について

評議員のアンケートを経て、いよいよ理事長選挙を評議員による間接選挙にするための定款改訂作業に入りました。理事選挙については、定数を３５名から２５名に削減する方針は決まりましたが、地方会定数、ひいては全国区制の導入などについて意見が分かれ、次回に間に合うか微妙な情勢です。

４．学会のホームページ作成

学会のホームページを作る方向で、とりあえず産業医科大学内に編集委員会の試験的事業として設置することが承認されました。また、学会本部事務局がニフティサーブと契約しましたのでE－mailが使えるようになりました。アドレスは｛KYU06653@niftyserve.or.jp｝　です。

九州地方会理事会報告

平成９年度第２回九州地方会理事会が、平成９年12月20日（土）午後、福岡産業保健推進センター（福岡市）の会議室で開催された。理事14名、監事１名、幹事１名の出席のもと、主として来年度の総会に上程すべき議案に関して討議が行われた。その概要は、平成９年度事業・決算中間報告ならびに平成10年度事業計画（案）について事務局より報告があり承認された。また、平成10年度地方会学会について、大久保利晃学会長（産業医科大学）より開催案が示され、６月12日（金）～13日（土）の両日にわたり開催することが決定した。一方、松下敏夫地方会長より、平成12年度第73回日本産業衛生学会の開催について説明があり、総会での議を経て九州地方会で引き受けることが了承され、学会長として大久保利晃理事を推薦することとなった。その他、地方会史の編集に関して討議がなされ、平成10年度中に発行することが確認された。（事務局）

学会研究会報告

第43回労働衛生史研究会開催さる

鹿児島大学医学部衛生学講座
松　下　敏　夫

産業衛生学会の労働衛生史研究会（代表世話人：野村茂）の第４３回研究会が、九州地方会との合同研究会の形で、去る平成10年１月17日（土）、福岡市の九州ビル会議室で開催されました。

主題は、「九州地方における労働衛生活動の展開」で、演題名（話題提供者：敬称略）は以下の通りでした。1.鉄鋼業における労働衛生活動　(1)黒田静・川畑是辰両先生を偲んで（倉恒匡徳）、(2)八幡製鉄病院の研究業績から（元田則雄・酒井淳）、2.鉱山業における労働衛生活動（馬場快彦）、3.造船業における労働衛生活動（橋本剛明）、4.化学工業における労働衛生活動（永利博美）、5.忘れ得ぬ先人たちの業績（野村茂）で、その他の演題として、産業における「標準化」の考え方と実際の歴史的な考察（山田信也）がありました。

主題に関する話題は、いずれも、九州地方における産業保健活動の歴史を理解する上で大変興味深く、有益なお話でした。特に、倉恒先生と野村先生のお話は、黎明期に活躍された先人たちの優れた業績から、これからの私たちの産業保健活動のあり方を洞察する上で、極めて示唆に富んだ内容でした。

なお、労働衛生史研究会は、今後、1996年に結成された国際労働衛生会議の「職業環境疾患予防の歴史に関する科学研究グループ」の活動（本年10月4－6日、ローマで第１回国際会議開催の予定）などとも連携をとりながら、新たな体制で活動を行う予定であることが紹介されました。

日本産業衛生学会指導医紹介

現在、登録番号1—245の指導医は登録更新の期間にあたり、登録変更の可能性があるとの大久保理事の御示唆もあり、登録番号255番以降の方に自己紹介を頂きました。

1—245番の方は、次号にて御紹介の予定ですのでよろしく御承知の程お願いいたします。

（以下、指導医登録番号順に紹介）

地域志向型の産業保健を期待しつつ

産業医科大学公衆衛生学講座
教授　**華表　宏有**（指導医登録No. 255）

1964年慶應義塾大学大学院医学研究科修了、1978年産業医科大学公衆衛生学講座教授、1993年から産業衛生学会指導医。

産業中毒学研究のメッカといわれる母校慶應義塾の予防医学教室（旧称）に、世間知らずの1人の若者が、「社会医学への道」を志してわらじの紐を解いたのは安保闘争のあった1960年のことであった。

フランス留学中に声をかけられ、72年の沖縄復帰の年に琉球大学保健学部に赴任した機会に、当時産衛理事長であった久保田重孝先生宛の退会届をしたため、産業医学とは縁を切ったつもりでいたところ、78年に本学に着任して、ふたたび会員にさせていただいたわけである。いわば私は出戻り会員である。

当地では、北九州・筑豊をフィールドとする社会医学教育の推進にかなりのエネルギーを注ぐことになった。その中でも直方鞍手医師会のお世話で、85年度から開始した「工業団地の産業保健活動」（96年度から「地域における産業保健活動」に変更）の学外実習は忘れ難いものであった。地域に開かれた産業保健活動の推進を心から期待している。

大分医科大学公衆・衛生医学（Ⅱ）講座
三角　順一（指導医登録No. 263）

昭和44年 熊本大学医学部卒業後、同大学公衆衛生学講座（野村　茂 先生）、衛生学講座（三浦　創 先生）のもとで産業医学、環境医学を学び、助手、講師、助教授を経て昭和61年10月より大分医科大学公衆・衛生医学（Ⅱ）講座を担当、平成4年文部省在外研究員として、米国 スタンフォード大学、ジョンスホプキンス大学へ留学、現在に至っております。

産業衛生関係では主に、産業中毒の研究を行う傍ら、産業衛生学会におきましては平成5年12月～産業衛生学会指導医（第263号）、同年より日本産業ストレス学会理事、評議員、平成7年4月～産業衛生学会専門医制度出題部会委員、許容濃度委員会起案委員、平成9年～九州地方会ニュース「産衛九州」編集委員長として、学会活動に参加させて頂いております。

学会の活動及び日頃の労働安全衛生領域における活動に対し、平成7年10月労働省労働基準局長功績賞を頂戴いたしました。ここに関係者の方々に御礼申し上げます。

この十年来「発想」について関心を抱き、平成6年5月大分に ノーベル化学賞受賞者 故 福井謙一先生をお招きして開催したシンポジウムは、私にとって開眼的なものとなりました。

今後も、21世紀を見越した産業衛生活動のお手伝いができればと思っております。よろしくお願い致します。

熊本大学医学部衛生学講座
上田　　厚（指導医登録No.279）

大分協和病院
柳楽　　翼（指導医登録No. 296）

1981年まで、岡山大学医学部衛生学教室に在籍し、それ以降、大分県勤労者医療生協（大分協和病院）にて、じん肺、振動障害、中毒性疾患などに対して、臨床を中心としながら、公衆衛生学的研究も試みてきました。

指導医の認定は、そうした成りゆきと、私の「できごころ」からいただいたものと考えております。しかしながら日常の業務にかまけて、今日までほとんど実績をあげることができず、お恥ずかしい限りです。

大分では、じん肺の発症と重症化が今なお続いており、また、振動病など運動器障害患者の「社会復帰をいかに進めるか」が、重要かつ困難な課題として残っています。じん肺や、宮崎県北部に発生した慢性ヒ素中毒症においては、肺ガンを中心とした悪性新生物の多発が引き続き認められます。これらの研究課題の疫学的なまとめに入るのが、当面の仕事だと考えています。

(財)九州産業衛生協会　天神診療所
左座　　寛（指導医登録No. 301）

新日本製鐵（株）八幡製鐵所
産業医　**田代　寛美**(指導医登録No.310)

久留米大学医学部第三内科(循環器)在局中、八幡製鐵所の健康管理健診(高血圧、心疾患、高脂血症)のお手伝いをしていましたが、その後(財)九州健康総合センターに出向し、２，３の企業（化学工場、工作機械、運輸業）の嘱託産業医を６年ほど経験して、平成2年から当所の専属産業医として現在に至っております。

大学無給医時代、アルバイト先の企業の病院（診療所）での一般診療や労働災害（急性CO中毒やその後遺症、急性塩素中毒、外傷など）の治療を通して産業医、管理職や従業員との交流は多少経験していましたが、なにぶん広範囲で奥が深い産業医学の世界、25，6年間臨床畑を歩いてきた小生にとって、入社当初はかなりの戸惑いがあったことも事実です。しかし、恩師木村　登先生の教えやこの時代の貴重な体験は、今でも小生の心の支えになっていますし、今では産業医学の道に進んで本当によかったと思っています。

このところ、会社の一員としての産業医業務はいかにあるべきかが少しは身に付いたようですが、しかし、まだまだ当所産業医の大先輩である松山　恒雄、酒井　淳両先生の後塵を拝しながら勉強の毎日であります。ましてや、学会認定“指導医”という名称も、小生には些か荷が重いと思っていますが、ご存知のように、製鐵所というところは有害業務のデパートとも言われる職場でもありますし、機会があれば研修医の皆さんの実地研修に少しでもお役に立てればと考えています。

今後ともご指導、ご鞭撻の程よろしくお願いいたします。

産業医科大学産業生態科学研究所
環境疫学研究室
高橋　　謙(指導医登録No.323)

産業医科大学環境疫学研究室の高橋と申します。昭和58年に慶応大学医学部を卒業後２年間の臨床研修を経て、昭和60年9月に研究生として産業医科大学に来たことが、私の産業医学との出会いです。以来、大久保利晃教授の下で産業疫学を中心に産業医学研究に従事してまいりました。産業医としての最初の経験は、産業医科大学大学院在籍中に嘱託産業医として神戸製鋼所門司工場（当時）へ週１回出務し、同時に西日本産業衛生会で瀬良好澄先生から、じん肺写真の読影や問診技術を教わったことです。大事な時期に両先生から産業疫学と職業性肺疾患というライフワークをいただいた気がしております。現在は、これらのテーマを中心としながら、国際協力も視野に入れた環境疫学的研究手法の開発と応用を目指しております。また、平成3年からはJR九州の嘱託産業医グループの一員として活動もしております。自分の適性を考えれば、学際的研究の実践を通じ、産業医の先生方との連携を図ってゆくことが指導医としての責務を果たすことにつながるのではないかと考えております。大変非力ではありますが、どうぞよろしくお願い申しあげます。

熊本大学医学部公衆衛生学講座
二塚　信(指導医登録No.333)

私は昭和39年に熊本大学を卒業し、1年間のインターンを経て、40年より現在の公衆衛生学教室で産業保健の研究に従事しています。大学院生時代に野村　茂、高松　誠先生に労働科学研究所の特にフィールドワークの方法を叩き込まれました。一次産業、特に林業の産業保健から振動障害の研究に焦点を当てて一貫してやって参りました。スカンジナビアのフィンランドの林業労働から熱帯雨林のカリマンタンやパプアニューギニアの林業労働まで、九州の国有林から出発して、国際的な場へと研究・実践を指向しています。という訳で、現在、ISO(国際標準化機構)の委員や本学会の振動障害研究会の世話人を努めさせて頂いています。林業は一人親方や零細企業などILOのいうInformal sectorに属する人々が圧倒的に多いため、国際的にも国内的にも、中小企業の労働衛生管理、地域保健の接点に興味を持っています。焦点を絞った研究・実践から普遍的な方向を見出すことが出来ればと思っています。地域の産業保健のレベル向上のためには、大学も重要な社会資源の一つとして、それなりの役割をもって、関与しなければなりません。指導医として大いに活用して頂きたいと希望します。よろしくお願い致します。

産業医科大学情報管理部
渡邊　博且(指導医登録No.338)

外国人会員の声

九州大学での留学生活について

九州大学医学部衛生学講座　大学院生
ジェシド・ロメロ

私は、南米コロンビアからの留学生です。1993年の秋に来日し日本語を習得した後、94年４月から、九州大学医学部衛生学講座において、大学院生としての留学生活をスタートさせました。

大学院入学当初は、何もかもが新しい経験でした。日本語がほとんどわからなかったので、もちろんコミュニケーションの面で大きな問題がありましたが、最も難しかったのは、まず日本の大学院で研究をするということがどういうことなのかわからなかったことです。

コロンビアの大学では、実験を行うための設備が整っていないため、授業を受けて、レポートを提出して、試験を受けるというのが、大学院での勉強スタイルでした。しかし、日本の大学院では、自分で研究計画をたて、実験を行わなければなりません。コロンビアの大学院時代とは違って、受動的な態度で大学院生活を過ごしてはいけない、と気がつくまでずいぶんと時間がかかりました。

留学生活４年目の今、日本に留学して一番良かったことはなんだろうか、と自分に問いかけてみたとき、積極的に研究に取り組む姿勢を学んだことが一番の収穫であったのではないか、と考えます。この４年間、研究室の皆さんには、大変お世話になりました。コミュニケーションがうまくできないことに悩んだ時期もありましたが、あれこれ悩まずに、自分の方から積極的に飛び込んでいく姿勢が必要だったのではないか、と今になって思います。

編集後記

平成８年の労働安全衛生法の改正で産業医の責務が明記され、産業医活動は着実に充実してきているように思われます。

さて、創刊号、第２号に続いて第３号をここにお届けできることを嬉しく思います。これまで九州各県における産業衛生活動に関与している中核的組織や人的資源の御紹介、産業保健活動、日本産業衛生学会九州地方会及び日本産業衛生学会本部理事会活動等を中心に、ニュースを編集させて頂いております。

今回、東京で御活躍で昭和53年から58年まで日本産業衛生学会九州地方会の会長を務められました熊本大学名誉教授野村　茂先生に「忘れ得ぬ先人たちの業績」と題する玉稿をお寄せ頂きました。ここに御礼を申し上げます。今後とも読者諸氏の御提案、忌憚のない御意見などを頂戴できれば幸甚に存じます。（文責：三角順一）

九州地方会ニュース「産衛九州」

発行　平成10年２月28日

編集正責任者：三　角　順　一（大分医科大学）
編集副責任者：馬　場　快　彦（福岡産業保健推進センター）
編 集 委 員：青　木　一　雄（大分医科大学）
青　山　公　治（鹿児島大学）
石　竹　達　也（久留米大学）
市　場　正　良（佐賀医科大学）
畝　　博（福岡大学）
大　村　　実（九州大学）
新　城　正　紀（琉球大学）
永　田　耕　司（長崎大学）
日　笠　理　恵（福岡県市町村職員共済組合）
前　原　正　法（宮崎医科大学）
宮　北　隆　志（熊本大学）
吉　積　宏　治（産業医科大学）
（五十音順）

〈編集事務局連絡先〉
〒879－5593　大分県大分郡挾間町医大ケ丘１－１
大分医科大学公衆・衛生医学（Ⅱ）講座
（担当：青木，園田）
ＴＥＬ(0975)86－5742
ＦＡＸ(0975)86－5749